

「我が子」

飯野文彦

井之妖彦が庭を掘り起こすと、地中から壺が出てきた。蓋を開けた途端、中から盛りのついたような泣き声がする。壺の中には赤ん坊がいた。

なぜこんなところに赤ん坊が——と驚かない訳がない。けれども、そのままにしておくこともできず、壺から赤ん坊を取りだした。何も身につけておらず、全身、紅を落とした柔らかい水飴のような液体でおおわれている。あたかもたった今、生まれ落ちたばかりのような有り様だった。

首からかけていたタオルで、小さな身体を包んでやった。赤ん坊は妖彦の腕の中で、さかんに泣きじゃくる。

困ったな。どうしよう。庭に立ち尽くしていると、泣き声が聞こえたらしい。母屋の玄関から、老母が出てきた。

「おやおや、純子さんもどったのかい」

純子というのは、初産を間近に控え、実家に戻っている妖彦の妻だった。そろそろ予

定日も近いので、妖彦も出向こうと想っていたのである。

「まだ戻るわけないじゃないか。それより、この赤ん坊だけど——」
妖彦が言い終えるより先に、老母は妖彦の腕から赤ん坊を奪った。

「まあまあ目も鼻も、お前の生まれたときに瓜二つだよ」

「ちよつと、待つてよ。その赤ん坊は——」

だが老母は妖彦の言葉も聞かず、

「お父さん。初孫ですよ。お父さん」

と声をあげながら、赤ん坊を抱いたまま母屋に戻っていく。後を追おうとしたとき、妖彦の携帯が鳴った。純子の母親からだった。

「妖彦さん。赤ん坊が消えたの」

「消えたって？」

「それが……」

純子の陣痛が激しくなったので、タクシーで掛かり付けの産科に向かった。これは生まれる、と分娩室に入り、いよいよ出産というとき、忽然と赤ん坊が消えたというのだ。つた。

なぜ、妻が出産というとき、妖彦が庭を掘ったかについても、ふれておく必要がある

だろう。実は夢を見たのである。ここ掘れワンワンではないが、夢の中で白い犬が、古くから家の敷地内にあるバレーボール大の石の下を夢中で掘り返そうとしていた。

目が覚めても、その光景が妙に脳裏に残っていた。これは何かのお告げかもしれない、と想い、物置からスコップを取りだしてきて、穴を掘ったのだった。

妖彦の家は、実家の敷地内にある。純子と結婚したとき、畑だった場所に新居を建てたのだった。



血液やらDNAやら細かく検査したところ、赤ん坊は妖彦と純子の子にまちがいないとなった。細かいことを言っても、仕方がない。それで医者と向こうの両親、妖彦と純子だけの秘密にした。

子はすすくと育った。かわいい女の子だった。我が子のために、妖彦も懸命に仕事に励んだ。ところが娘が三つになって、七五三のお祝いに神社に行ったとき、ちよっと目話をした隙に道路に出て、走ってきたトラックに轢かれた。即死だった。

妖彦は仕事もせず、酒に溺れた。純子のほうが、立ち直りがはやく見えた。娘の一周忌を終えたとき、彼女のほうから離婚を切り出した。

「ぜったいに別れない」

妖彦は言った。妻は実家に身を寄せた。ひとりになった妖彦は、ますます酒に溺れた。飲みながらも、なぜこんなことになったのかばかり考えていた。

結論はひとつしかない。子供さえいれば何とかなる。子供さえいれば、自分は立ち直れる。そうすれば純子も戻ってくる。子供さえいれば――。

「そうだ。子供をつくろう」

妖彦はふらふらと家を出て、実家との間にある物置に向かった。奥に隠しておいた壺を取り出した。あのとき掘り出した壺である。

自慰して大量の精液を壺の中に放出した。蓋をすると、あの石の下を掘り返し、かつてそうであったように埋めたのだった。



十月十日後、妖彦は壺を掘り起こした。

中に赤ん坊が居た。抱き上げ、かつてのように母に見せようとしたが、すでにこの世にいないことを想いだしてやめた。

「さて、どうしよう。まずはミルクだ。そうだミルクを買いに行こう」

赤ん坊を抱いて向かったスーパーからの通報で、妖彦は警察に保護された。

彼が抱いていた干からびた赤ん坊の遺体は、検査の結果、以前、純子が妊娠した双子

のうちのひとりに間違いないとわかったのであった。

(了)